

## 6. 釧路川流域住民の意識調査

### 6-1 グループインタビュー調査

#### (1) 調査の目的

平成9年に河川法が改正され、河川整備に関する具体的事項（河川整備計画）を定めるときは、地域の意見を反映させるという計画制度が導入され、北海道開発局及び北海道では、平成14年10月に地域住民や学識経験者からなる釧路川流域委員会を設置し、今後20～30年間の具体的な河川整備の内容を示す「釧路川水系河川整備計画」を作成するための検討を行っている。

今後、流域委員会では、釧路川流域及び釧路川が目指すべき将来像（釧路川ランドデザイン）を検討し、流域内における各地域特性と機能分担に応じた河川整備内容を作成する予定だが、こうした背景から、釧路川流域に住んでいる人々の生活、経済活動などを踏まえて、住民の声を生かした計画作りが必要となってきた。そこで、このたび、釧路川流域のランドデザイン及び河川整備計画を検討するに当たって、同地域の住民を対象に、釧路川の現状と未来について意見を聞き、主にランドデザイン策定の資料として活用することとした。

#### (2) 調査手法

互いに他者の刺激を受けながら、考え、意見を述べていくマーケティングで用いられるグループインタビュー（GI）の手法を政策企画の分野に応用したPPGI(Policy Planning by Group Interview)を採用した。PPGIは、釧路公立大学地域経済研究センターの小磯修二教授により開発された調査手法であり、少人数を選抜したグループで、インタビュアーによるグループインタビューを通じて、対象者のより質の高い深層の意識を把握するとともに、そこから創造的な政策提案に結び付けていこうというものである。

#### (3) 調査対象者と対象者選定

釧路川流域住民の中でも、比較的まちづくりに関心があり、少しでも生活や仕事の中で釧路川と接触のある方々を条件とし、対象者選定については、流域委員会を構成する各自治体に推薦を依頼した。グループ構成は以下のとおりである。

- (A) 下流域都市グループ（釧路市在住男女各4名／職業は商業、教育、漁業、建設、主婦など）
- (B) 中流域・下流域グループ（釧路町在住男女各2名、標茶町在住男女各2名／職業は、漁業、主婦、林業、商業、建設、教育など）
- (C) 上流域・支流グループ（阿寒町在住男女各1名、鶴居村在住男女各1名、弟子屈町在住男女各2名／職業は観光、農業など）

#### (4) 調査日時・会場

- (A) グループ：2003年7月25日（金）19:00～21:00 釧路地方合同庁舎 7階会議室（釧路市）
- (B) グループ：2003年7月26日（土）10:00～12:00 標茶町開発センター（標茶町）
- (C) グループ：2003年7月26日（土）14:30～16:30 幌呂農村環境改善センター（鶴居村）

#### (5) 主な調査項目（質問内容）

- 普段の生活の中での川とのかかわりについて
- 釧路川流域における川の役割について
- 釧路川の環境について
- 将来に向けた釧路川のランドデザインに向けて

## (6)分析の視点

今回の調査では、流域別の3グループでインタビューを行ったが、居住流域地域の違いにおける川への接し方や考え方について、明確な差違があったとは言いきれなかった。下流域都市グループにおいては、川との接し方や水質に対する意識や飲料水などへの利水の面で、他のグループに対してやや意識の高さが感じられたが、流域別の違いを明確に指し示すことは難しい。

しかし、職種属性や趣味など、日常生活における川とのかかわりの中で、川に対する認識、考え方などには差違が見られている。そこで、本調査の主旨であるランドデザインを探る上で、ここからは川とのかかわりや職種属性を踏まえた上で、調査対象者を以下の七つの属性に分類し、検討を行っていくこととした。

対象者の属性と主な特徴

属性名称	主な特徴
子供中心主婦・子供を通じた自然継承派	自身の行動よりも子供を通じた川とのかかわりが中心。子供の川での遊びや、その周辺の自然環境などに興味がある。今後の川に対する意見なども、子供の目線での意見が中心。また、河川敷周辺の施設や散策路など、具体的な要望や意見が見られる傾向がある。発言の多くは、日常生活のちょっとした出来事から想定できるものが多い。
都市的職業人	都市部に在住し2次産業、3次産業に従事する職業人。社会的意義を認識した上での発言の傾向がある。個人的な意見ははっきりと述べるが、他業種の人や違った環境にある人の立場など、周辺環境を自分なりに把握し、それらとの調整も視野に入れた建設的な意見が見られる。
漁業関係者	漁業関係の職種。職業を通じて川とのかかわりを認識している傾向がある。水質、水量などに比較的敏感で、植樹活動にも関心がある。
酪農業者	酪農業者。生活の中で川との直接的なかかわりは少ないが、家畜糞尿問題が大きな悩みとなっており、この問題を通じて川を考える傾向が強い。温度差はあるものの、家畜糞尿処理はできる限りの努力をしているが、その努力が認められていないと感じている。しかし、川の環境が悪化している理由は家畜糞尿問題のみではないと考えている。
林業関係者	林業関係者。森林と川とのかかわりを理解し、仕事を通じて川の保全などに役立っていきたいと考えている。ただ、一方で、森と川の関連メカニズムや科学的な裏付けなど、その情報不足を感じている。

アウトドア趣味派・フィッシング趣味派	カヌーや釣りなど、川とかかわる趣味を持ち、趣味を通じて川と接する機会が多く、そのことで安らぎや癒される感覚を認識している。
自然系ガイド・宿泊業・NPO	カヌーや釣りなど川にかかわるガイド業や宿泊業などに従事、あるいは自然関連の市民団体などに所属している。川との接触頻度は非常に高く、川の変化には最も敏感。また、釧路川に対しては自然と開発が両立した川として一定の評価をしている。カヌーや釣りなど、釧路川をレジャーで利用する人々が増えていること、自然環境や生態系に影響がある河川事業などに対して不安を感じているが、声高に自然保護を訴えているわけではない。

## (7) 調査結果の概要

### 1) 普段の生活の中での川とのかかわりについて

- 全般的に在住地域（流域地点）による川に対する意識は大きな差はなく、居住地よりも趣味や職業などの違いによってその考え方などに違いが見られた。
- 下流域都市グループでは、域内で川の水そのものに触れて遊ぶ（釣りやカヌー、子供の水遊びなど）ことはあまりなく、そういった活動は他流域などへ出かけていく傾向が読み取れる。一方、中流域・下流域グループ、上流域・支流域グループは、域内でそういった活動を楽しんでいることがうかがえる。
- 子供のいる主婦は子供の遊び場として川と接する場面が多く、川に対する役割や環境についても、子供を中心とした考え方が見られる。
- 一方、趣味でアウトドアを楽しんでいるアウトドア趣味派、フィッシング趣味派、カヌーやフィッシングなど自然系ガイド・宿泊業・NPOを職業とする対象者は、川との接触度が高く、川の変化に非常に敏感であり、環境の変化、釧路川への観光客増加などに危機感を抱く声が見られる。
- 漁業者は、自身の職業との結び付きで、植樹などにも関心が高いが、植樹活動は、比較的居住範囲に近い地域のみで、上流域など遠方に出向く機会は見られていない。

### 2) 釧路川流域における川の役割について

- これまで大きな災害等がないためか、治水に対する認識を強く感じている人は少なく、治水に対しては“当然”との意識が刻まれているように感じる。
- 一方、利水については、飲料水への利用などについては、下流域都市グループでは意識が高い。
- 子供中心主婦やアウトドア趣味派、フィッシング趣味派などは、川に安らぎや癒しなどの機能を感じている。
- 釧路川は、利水の面で、漁業や観光業など、地域の経済活動に密接にかかわっていることを理解している一方で、豊かな自然の川の環境を守ることの重要性も感じている。

### 3) 釧路川の環境について

- 上流域、中流域、下流域の水質の違いを認識している人は多い。下流部の川の汚れは多くの対象者が指摘している。
- 下流域都市グループでは、下流部の汚れを岩保木水門により、川の流れがせき止められているためと考えている人や、工場排水が川に流れ込んでいると感じている人もいる。
- ここ数年で、水質や水量などの変化に漁業者、自然系ガイド・宿泊業・NPOなどは、強い危機感を感じている。大自然、雄大な釧路川などのイメージが根付く一方で、その変化は急激で、漁業関係者や自然系ガイド・宿泊業・NPO らの経済活動に影響をもたらすことを懸念している。
- 酪農業者は家畜糞尿問題を認識しているものの、川の汚れは家畜糞尿のみが原因ではないと考えている。酪農家自身も家畜糞尿処理については、さまざまな努力を行っているため、その努力を理解してほしいと訴えている。

< 属性別の発言の傾向から探るキーワード・方向性 >

	普段の生活の中での川とのかかわりについて	釧路川流域における川の役割について	釧路川の環境について	将来に向けた釧路川のランドデザインに向けて
子供中心主婦・子供を通じた自然継承派	子供が水と親しめる場 自然の、昔ながらの水辺空間 川の大切さ、川を守る生活の継承を	子供の遊び場、学び場 流域住民に対する川の重要性の啓蒙 川は、憩いや安らぎを与える存在 釧路川は域内のみならず、道民、国民の財産 ホタルの棲む川	上流域～下流域に至る水質の変化が、1本の釧路川としての一体性を欠く要因になってはいないか？ 大自然や環境、川を伝える場・学ぶ場	子供たちが安心して水と触れ合える川 川で泳ぐ魚を感じられる川 子供たちが自然体験をできる川 上流と下流の一体的なつながり 各地域の個性や特徴を生かした川づくり 住民と専門家による川のあり方の議論 釧路湿原の大動脈 自然の門戸を開放する地域
都市的職業人	自然の、昔ながらの水辺空間 流れる川、生きた川	釧路川や釧路湿原は地域の“顔” 川を観光資源に 生活、経済、娯楽など、川には多くの役割、機能があり、そうした多くの機能を受けとめつつあるのが釧路川の一つの特徴	“環境”を考え、学び、実践する場 釧路川としての流域全体の一体感 住民主体の川の再生・川の保全 子供が安心して遊べる川 おいしい水を創る川	上流域から下流域に至るまでの一貫性の創造（環境、水質、キーワードなど） 住民参加の川の保全と利用 多機能を生かす川 地域が誇りに思える川 地域の共有財産 川を守るための規制や罰則の必要性 生きた川、流れる川 川を守り、次代へ継承する主体は？
漁業関係者	漁業を支える釧路川	川は地域の財産、国の財産 きれいな川 安心して遊べる川 サケが戻ってくる川に （植樹活動などで）自ら川を守る努力 支川を含めた全体での釧路川のあり方	川に対する住民意識の啓蒙 川のマナーを守る地域 川を守るための森づくり 住民自身が川に接する機会を 川を知り、学ぶ機会を	川を総合的に考える 流域全体で議論できる川 川を守るためのマナーを学び、実践する場 住民自身が再生する清流 サケが戻る川 川を上るサケを代々子供に伝えられる川 緑が多く、清水が流れる川
酪農業者	酪農家の努力を理解する仕組みを	川が存在が酪農家を苦しめている？	開発と自然保護をどう両立、共生させるか 川を利用する人間がマナーを守るための啓蒙活動を 酪農家の努力を理解する仕組みを 川を生かし、守るための一体的な組織や体制を	大いなる川、母なる川 住民参加で考える川の保全と川の将来 川の恩恵を受ける全ての人々が語り合い、考える将来 違う立場の人の事情も理解し合いながら、川を考える
林業関係者	山林の機能の理解を広げる	山林機能の知識蓄積と、林業関係者の指導力なども今後川を守るためには重要では？	川を守るためには、川の周辺だけで解決できない問題が 林業・農業などまでを包括した総合的な視点が必要 化学的な情報の共有のための情報発信と川に触れる体験を増やす	上流から下流まで一貫した環境、水質の維持を 釧路川全体、どこでも楽しめる空間と環境づくり
アウトドア趣味派・フイツィング趣味派	釧路川流域のまちと川とのかかわり、歴史を紐解いてみる必要性 遊ぶことで学ぶことができる川 遊んで学ぶ価値のある川が釧路川 幻になったイトウ	恵みの水をもたらす釧路川 釧路川を題材にして共通認識に立つことができるものは何か？ 流域は一つ 癒しの川 自然のまま子供が川と触れ合う環境を創り、守る 流域間で川を学ぶ	流域住民にとって「釧路川」はどこからどこまでか？ 地域を縦貫する川としての共通認識を 支流も含めた保全が釧路川全体の保全に 後世に残すべき釧路川と釧路湿原	住民、企業がともにつくる環境 環境教育を実践する地域 橋の上からサケの溯上が見える川 釧路川でつなげる地域学 上流・中流・下流・支流が一体になって考える場を 川の流れのように交流ある人間関係がある地域 全ての産業の人々が、等しく川の恵みを受けられる地域 単位で考えるのではなく、一貫した「釧路川」の創造が必要
自然系ガイド・宿泊業・NPO	利用を促進する地域や利用しない地域など、地域によって機能をしっかり分ける 優位性のあった釧路川の自然環境に変化の兆し 川だけでなく、山などを含めた大きな意味での環境、水の循環に合わせた保全の必要性	湖と川を体感できる数少ない場所 生命（いのち）を尊重する川 人と自然と産業のバランスを考えた地域づくりの土台づくり 自然を生かした川の将来を考える人材を育成する場	川を生かし、継承するため、根底に一つ筋の通ったものを 環境教育の場 利用する場としない場所など地域別の機能分担を 残された貴重な自然を守り、次代に継承 個々の地域事情を考慮して川を考える	地域住民による情報共有 生活の中で愛着の持てる川 釧路湿原の大動脈 地域の機能分担による自然環境の保全 湿原の恵みを等しく得られる地域 生態系の保全 自然と開発が共存する川 反省を生かす川 住民が決める川の活用 川を知り、考え、学ぶ場 釧路川流域一体のつながり

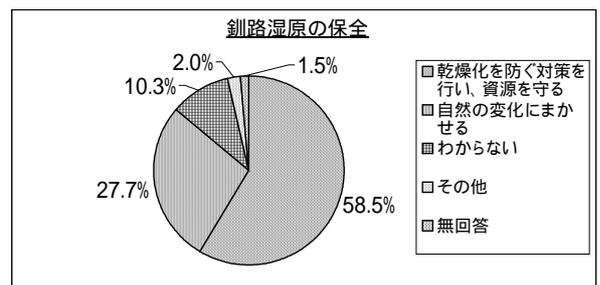
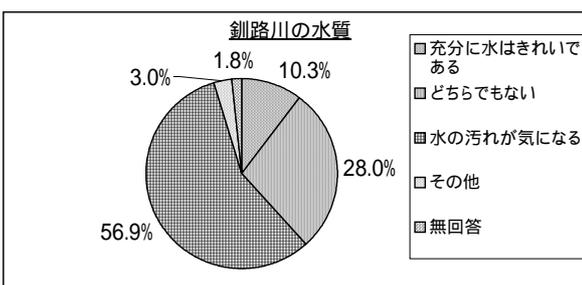
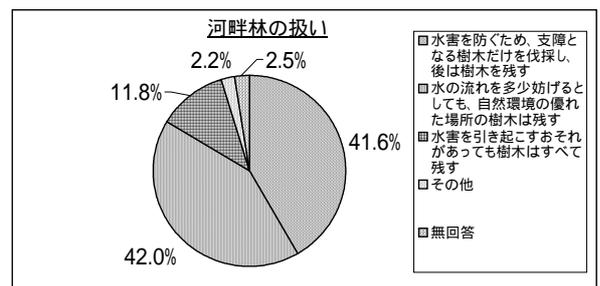
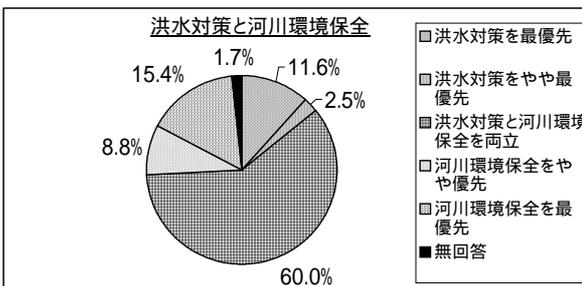
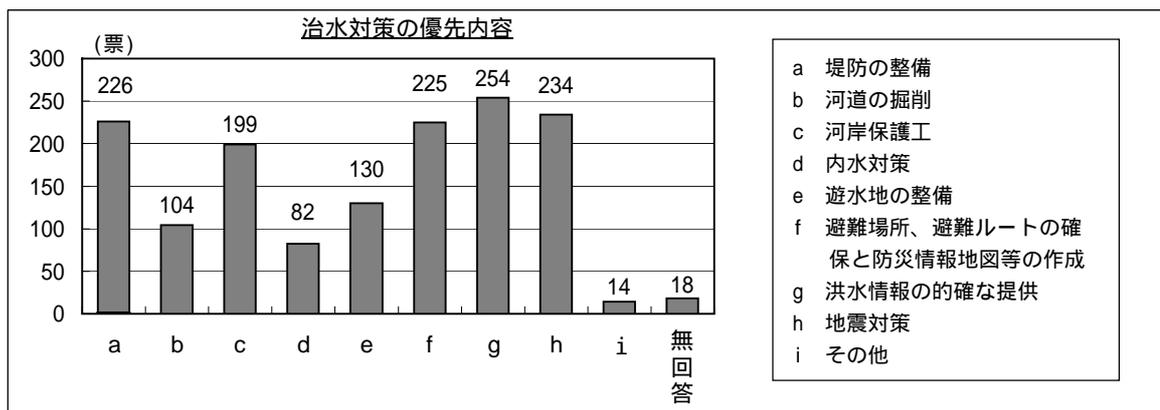
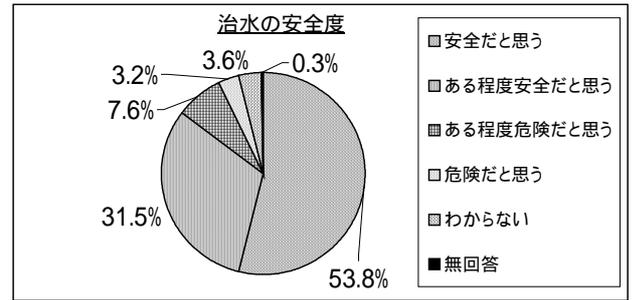
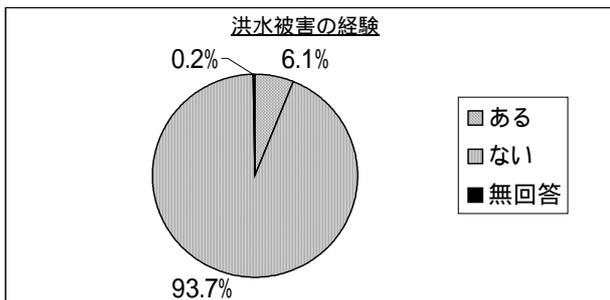
## 6-2 釧路川流域アンケート調査結果

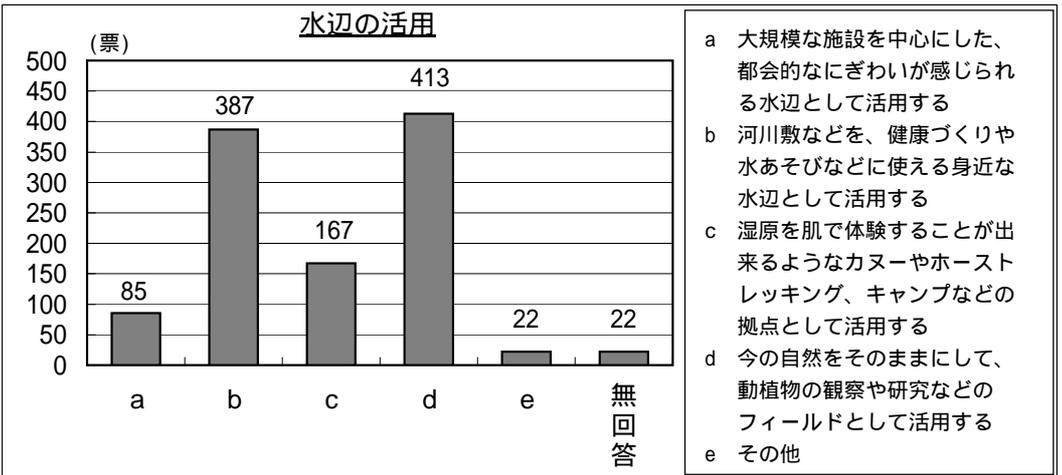
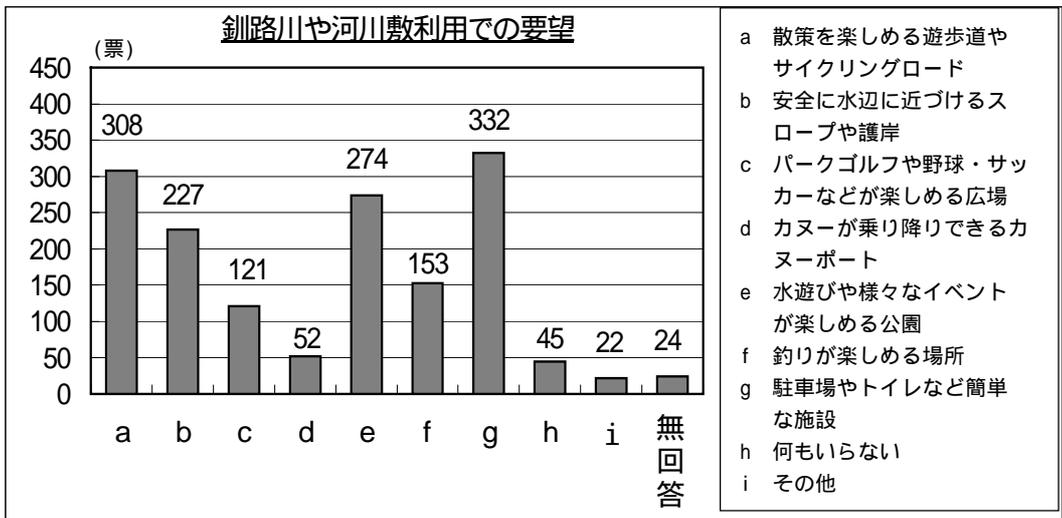
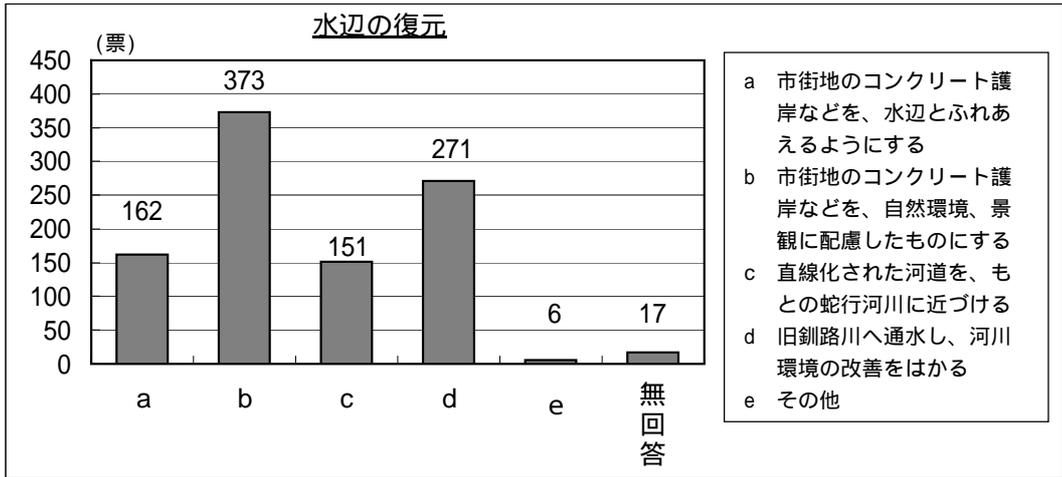
アンケートは釧路川の整備計画を策定する際に、流域住民が安全に生活する上で基本となる治水、利水等の整備に対する具体的な要望・意識を把握するとともに、河川環境の整備保全と利用を求める流域住民の具体的なニーズを的確に捉えることを目的に実施した。

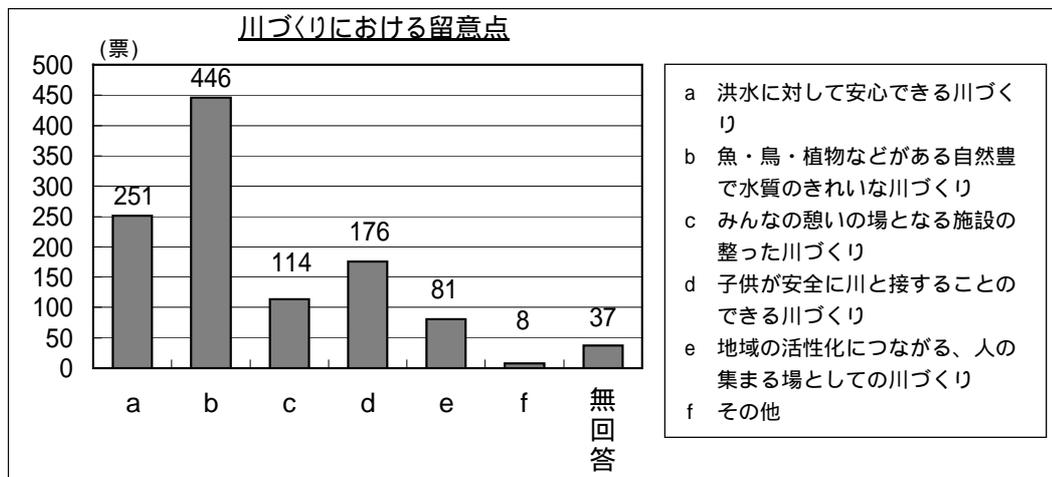
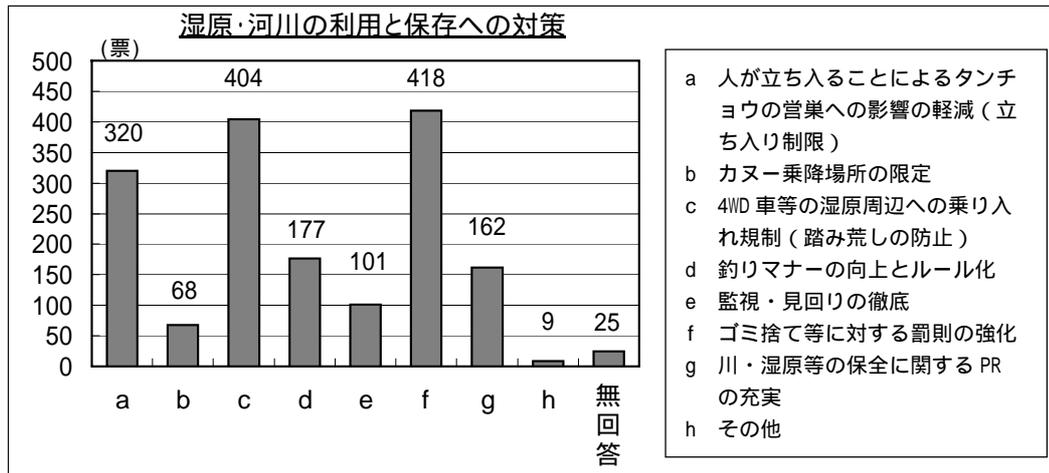
調査は平成10年度に流域5市町村(釧路市、釧路町、標茶町、弟子屈町、鶴居村)の住民から無作為に抽出した2,060人を対象とし、630票(30.6%)を回収している。

### 調査結果の概要

#### (1) 選択設問回答のまとめ







## (2)自由回答のまとめ

### ■ 釧路川の将来像

- 釧路川流域は、地域住民にとっての故郷であるという愛着や豊かな自然が残る日本の貴重な財産であるという認識が強く、基本的には手を加えず、蛇行の美しい川の原型を保全することが指向されている。護岸等、既に整備されている部分についても、湿原風景を想わせる姿への再生が期待されている。
- 釧路川は、人間生活も含めて多くの動植物を育む母なる川であると考えられており、水がきれいな川ということも一つの将来像になっている。

## ■ 釧路川の整備方向

- 自然への配慮に欠く従来の開発や整備への反省から、地球的視野にたった生態系の保全と流域住民の安全な暮らしの実現という相反する方向の調和に最も大きな関心があり、最低限の安全性が保障されることを前提に、前者を重視するべきとする意見が多く出されている。
- 自然界との調和を図るための方法としては、開発する場所と保全する場所との明確な使い分けや、避難情報等のソフト施策の展開に重点をおくなどの具体的なアイデアが挙げられている。
- 総合的な観点からの川づくりを実践するためには、河川行政のみならず、地域住民のニーズやその他関連する事業・施策等を含めた一体的な検討が必要であるという指摘もある。

## ■ 今後の治水対策

- 釧路川流域の保水力の低下による洪水の発生や湿原の乾燥化等が懸念されている。
- これらの根本的な解決に向けての主な取り組みとしては、上流や支流域における農地開発等のために伐採された森林等の再整備や、直線化された河川もとの形態への修復等が具体的に挙げられている。
- これらの実現のためには、市町村、北海道、国そして地域が一体となった治水対策への取り組みの必要性が指摘されている。

## ● 河川環境の整備・保全

- 地球環境的な視点から現存する自然環境を保存してゆくことが指向される一方、大河川であるがゆえに子供から高齢者までが水辺に親しめるような河川環境整備への期待は大きく、特に次代を担う子供たちの自然観察等を通じた環境教育の場として注目されている。
- 市街地部におけるコンクリート護岸の緑豊かな多自然型護岸への再整備や、糞尿処理の規制やゴミや空き缶などの投げ捨てる防止、ヘドロの回収等による水質の向上、RV車、カヌー等の乗り入れ規制等による生態系の保全、その他桜並木の植樹等による河川景観の向上、魚道の確保等、多方面にわたる意見・提案等が出されており、流域住民にとっての関心の高さが伺える。
- 流域住民の自然環境に対するモラルを向上させるようなPR活動の必要性も挙げられている。

## ● その他

- このようなアンケートの主旨を従来の河川行政からの転換と評価する意見がある一方、流域住民の意向が反映されなかった従来の河川整備プロセスへの不満や、縦割り行政の限界、統計的処理への不安、現場主義のすすめなど、河川行政全般への不信感も伺われる。
- これらの意見は、総じて釧路川という地域の財産や生活と密着した自然への愛着が背景にあり、地域性に即した河川整備の実現への強い想いの現れであると考えられる。